【プロローグ】

ユウスケ　２０２６年。７月５日。日曜日。

アンナ　休日の朝にもかかわらず、千駄ヶ谷駅前は凄い人だった。

エリカ　日の丸の旗、青いユニフォーム、顔にはペインティング。日本を応援する人、人、人。

ナルミ　響き渡るニッポンニッポンの大合唱。

アンナ　私は、小中高と同じ学校に通っていたユウスケに誘われて、ＦＩＦＡワールドカップ２０２６、３カ国共同開催、ベスト１６。アメリカ・ペンシルベニア州、フィラデルフィアスタジアムで行われている日本対ブラジルの一戦を、パブリックビューイングで観戦しようと、国立競技場へ向かった。

ユウスケ　前半４５分。ゴール正面からフリーキックのチャンス。蹴るのは日本代表、背番号１８番、久保建英。

アンナ　すごい歓声！

ユウスケ　行けー！久保ー！男なら決めろー！

ナルミ　軽い助走から、左足でキック！

エリカ　あ！

アンナ　あ！

ユウスケ　あー、外れた…。ホイッスルが鳴る。午前８時４５分、前半終了。０対０のまま、ハーフタイムに入る。

【第１場】

ユウスケ　『０・０かあ！いい試合なんだけどなあ！ちょっと予想外だなあ！』

アンナ　ユウスケは一人、テンション高く話し続けている。

ユウスケ　『もっと行けるはずなんだけどなあ！久保も、三苫も、全然だめだもんなあ！こんなはずじゃないんだけどなあ！おかしいなあ！』

アンナ　それはまるで、日本代表がブラジル代表に勝つような話しっぷり。すると、私に話しかけてきた。

ユウスケ　『どう？初めてのサッカー観戦は。』

アンナ　『ＬＥＤビジョン、めっちゃきれい。本当にスタジアムにいるみたい。』

ユウスケ　『うん。』

アンナ　『それに、観客の一体感。すっごい鳥肌立つ。目の前で試合が行われてないのに、こんなに盛り上がるんだね。』

ユウスケ　『うん。日本中が今、日本の勝利を願って応援しているように、人の心は空を飛ぶ。』

アンナ　『空を飛ぶ？』

ユウスケ　『そう。人と人は対面していなくても、想いを馳せたり、共有したり出来る。だから俺も、今日、アンナを誘ったんだよ』

アンナ　『そう、なんだ。』

ユウスケ　『飲み物、買ってくる。』

アンナ　『行ってらっしゃい。』…ユウスケは２６０ブロックの階段をおりていった。ユウスケの姿が見えなくなると、ため息が出た。私はどうしてここにいるんだろう、何をやってるんだろう。こんなこと、やってる場合じゃないのに…。５日前、私は重大な決心をした。父の代から続く洋菓子店を、閉店することにしたのです。理由は、経営不振。２０２４年から顕著になり始めた物価高。なんとか凌いで、お店の経営を徐々に軌道に戻す、そういう計画だったけど、うまくいかなかった。材料費の高騰、光熱費の高騰。値上げするしか方法がなく、でもそうすると、逆に売れない。元の値段に戻すわけにもいかず、色々策を打ってみたけど、どれもうまくいかず、完全な赤字店に転落してしまった。まだ、やれる。そう思う気持ちもあったけど、私はお店を閉める決断をし、ホームページに「閉店します」と書き込んだ。でも、そう書き込んだものの…本当にやめていいのかな？そんな思いが沸き上がってきた。確かにお店の経営は赤字続き。このまま続けていくのは危険すぎる。でも、もう少し頑張ってみてはどうかな？もしかしたら、経営状態が好転する可能性もあるんじゃないかな？創業者である父の想いもある。もしかしたら、何かの奇跡が起こって、例えば何かの商品に火がついて、売り上げが戻る可能性だってあるんじゃないかな？…そんなことを考えていた時、高校の同級生のユウスケから、７年ぶりに連絡が来たのです。

ユウスケ　『久しぶり。』

アンナ　『久しぶり。元気？』

ユウスケ　『元気。アンナは？』

アンナ　『元気。』

ユウスケ　『よかった。』

アンナ　『どうしたの？』

ユウスケ　『なあ。久しぶりに会おうぜ。』

アンナ　『え？』

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

エリカ　ナルミちゃんと私はエックスで知り合った。私がナルミちゃんのアカウントに興味を持ち、フォロー、そしてナルミちゃんもフォロバ、やがて私たちはダイレクトメールでやりとりするようになった。そして今日、私たちは旅に出る。この試合が終わった後、二人でこの世を去り、この世ではないどこかへ旅立つのだ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ユウスケ　『俺さ、大体の事情、知ってるんだよ。アンナのお店の事。』

アンナ　『え？何で？…7年間会ってなかったのに。』

ユウスケ　『フフフフフ。』

アンナ　『え？』

ユウスケ　『それで、アンナの思いも大体わかってる。俺たち、腐れ縁だし。』

アンナ　『え？』確かに、私たちは腐れ縁。小中高と同じ学校。高校の時はクラスも部活も一緒だったし、よくつるんでた。

ユウスケ　『それでさ。いいアイデアがあるんだ。』

アンナ　『いいアイデア？』

ユウスケ　『うん。アンナは経営している洋菓子店を閉店すると告知した。でも、やっぱり撤回しようかと迷ってる。』

アンナ　『よく知ってるね？』

ユウスケ　『フフフフフ。…それで、どうしたらいいかわからない。自分がどうしたいのかもわからなくなってきている。そうだろ？』

アンナ　『まあ。』

ユウスケ　『フフフフフ。…まだ、やれるかも。そう思う気持ちもあるけど、続けてみて、失敗したら取り返しのつかない負債を抱えることになる。だから。』

アンナ　『だから？』

ユウスケ　『もし、決められないのなら、その決断を、何かに委ねてみるって言うのはどう？』

アンナ　『何かに委ねる？』

ユウスケ　『そう。何かの結果で、どっちに進むか決めてもらうんだよ。だって、答えが出ないんだったら、何かに決めてもらうしかないだろう。』

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

エリカ　この、満員の大観衆の中で、こんなことを考えている人間が２人、この中にいるとは、誰が考えているだろう。ちょっと、優越感。でも…この世に生きている価値がない。自分が大嫌い。だから私はこの世を去り、全てを終わりにすることにした。だけど、ナルミちゃんはこう言った。

ナルミ　『やっぱり、あんたは来ちゃダメ。』

エリカ　私はナルミちゃんが好きだから、一緒に居られればいい。ナルミちゃんについていくと言ったんだけど、ナルミちゃんはダメの一点張り。私はずーっと粘って、ナルミちゃんについていきたいとおねだりをする子供のように駄々をこねていると、ナルミちゃんはこう言った。

ナルミ　『私は、この計画自体、迷ってる。』

エリカ　自分で言いだしたのに、何言ってんの？…きっと、私を巻き込むことを恐れているのだろう。これも、ナルミちゃんの優しさなのだ。でも、大丈夫。迷惑かけるようなことは何もないから。…さらに駄々をこねていると、ようやく折れた。でもそれは条件付きだった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

アンナ　『まあそうだけど。でも、こんな重要な決断を、何かに委ねるってのはちょっと。』

ユウスケ　『でも、ずっと決まらなかったんだろ？なら、ずっと決まらないよ。』

アンナ　『そうかもしれないけど…ちなみに、決めてもらうって何に決めてもらうの？』

ユウスケ　『明日、何があるか知ってる？』

アンナ　『明日？…サッカー？』

ユウスケ　『そう。ワールドカップ。日本初のベスト８がかかった試合。…どっちに転んでもスッキリするだろ。それに、ずっと悩んできたんだろ？息抜きも大切だよ？』

アンナ　何それ？と思ったけど、その通りだった。私はこの１年間、ずっと悩んできた。お店の事、父の事、自分の将来の事、ずっと悩んできて、物価高で経営状況がどんどん悪くなっていってるのに、決断できなかった。だから私は、ユウスケの提案に乗ることにして…。

ユウスケ　賭けにしよう。

ナルミ　賭けにしよう。

アンナ　賭けにした。ワールドカップ、ベスト１６、日本が勝ったら。

エリカ　勝ったら。

ユウスケ　考え直そう。

ナルミ　考え直そう。

アンナ　考え直そう。でも、日本が負けたら。

エリカ　負けたら。

ナルミ　決行しよう。

ユウスケ　終わりにしよう。

アンナ　終わりにしよう。

【第２場】

アンナ　下馬評では圧倒的ブラジル有利。つまり、お店は閉店する可能性が高いということになる。でも、ユウスケが言うには…。

ユウスケ　『ブラジル有利？そんなことないって！５・５、フィフティーフィフティー！日本さ、今、めっちゃ強いんだよ！』

アンナ　そうなの？私、サッカー詳しくないから、よくわからないけど、でもユウスケがそう言うのなら、そうなのかな。ユウスケを信じて、運命を委ねよう。考えても、答えが出なかったんだし。…私が経営する洋菓子店は、父のものでした。父は新型コロナが猛威を振るっていた頃、事故で他界。当時大学生だった私は、決まっていた就職を蹴ってお店を継ぐ決心をし、大学を辞め、パティシエの専門学校に入り直し、卒業後、すぐにお店を再開しました。…再開してから、父がどれだけ素晴らしいお店を作ってきたのか、痛感しました。父の分まで頑張ってと通ってくれるお客様。私は何度も勇気をもらいました。私の腕前と言えば、父の味を再現できているのかわからないけど、お店は連日行列。でも、その勢いは長く続かなかった。いい流れを、物価高に潰された。私はお店の経営に頭を悩ま

すようになる。…そんな私に希望を与えてくれたのは、妹のエリカでした。エリカはそんな私をいつも応援してくれました。屈託のない笑顔で笑うエリカの明るさは、お店の暗い雰囲気をいつも明るくしてくれました。エリカの笑顔は、私の宝物でした。そして、私と一緒に洋菓子店を経営するのが夢と言ってくれていた。だから、閉店をエリカに告げた時は、本当に辛かった。

★回想シーン

アンナ　『エリカ。』

エリカ　『何、お姉ちゃん。』

アンナ　『お店のことなんだけど。』

エリカ　『うん。』

アンナ　『実はね…やめることにしたんだ。』

エリカ　『え？』

アンナ　『やめるの。ごめんね。』

エリカ　『どうして？』

アンナ　『この前まで高校生だったあんたにこんなこと言うのなんだけど、借金が大分たまってるんだ。もうちょっと、どうしようないところまで、きちゃったんだよね。』

エリカ　『そうだったんだ。私、秋からパティシエの専門学校に行くのに。』

アンナ　『そうだよね。』

エリカ　『私、お姉ちゃんと一緒に、お父さんのお店を経営するのが夢だったのに。』

アンナ　『そうだよね。わかってる。』

エリカ　『なんとかならないの？』

アンナ　『ちょっと、難しいかな。』

エリカ　『誰かに助けてもらうとか。』

アンナ　『もう手は尽くした。』

エリカ　『じゃあ、お客さん呼ぶしかないよね。新しい商品開発するとか。もっとＰＲするとか。』

アンナ　『…。』

エリカ　『お客さん来たら、問題解決じゃん！もうちょっと頑張ろ？ね、もうちょっと頑張ろうよ！』

アンナ　『頑張ろう頑張ろうって言っても無理なものは無理だよ！経営ってそんなに簡単なもんじゃないの！この前まで高校生だったあんたにはわからないでしょ！それに、お客さん呼ぶって、そんな簡単なことじゃないよ！誰が連れてきてくれんの？あんたが連れてきてくれんの？あんた、何もできないでしょ？勝手なこと言わないでよ！』

★回想シーン終わる

アンナ　ついかっとなってしまった。ちょっと後悔してる。でも、あの子ももう１８歳。きっとわかってくれると思う。そう言い聞かせて、とりあえず、今はユウスケの提案に乗ったんだから、この試合、最後まで観戦しよ、そう思って、スタジアムのＬＥＤビジョンにまた目を向けた。

ユウスケ　俺は本当に底意地が悪い人間。俺は相当の根回しをして、今日ここにいる。…この試合、日本はブラジルに敗れる。いまだ０対０。ブラジルもまだ本領発揮とはいっていない。でも、後半、総攻撃を仕掛けるだろう。日本は、きっと無残に破れる。そりゃそうだろ！ブラジルだよ！？勝てるわけないじゃん！…俺とアンナは、小中高とずっと同じ学校に通っていました。俺たちは、勉強はいつもトップクラス。でも俺は、アンナに勝ったことは一度もありませんでした。アンナは努力と信念の人。やると決めたら、必ずやり通す。俺はいい加減で、いつも詰めが甘い。だから、いつもアンナに勝てない。そんな１０代をずっと過ごしました。俺はいつもアンナを疎ましく思っていました。仲の良い友達を演じていたけど、本当は邪魔で邪魔で。こいつがいなかったら俺が１番なのに。なんで俺は女に負け続けなければいけないんだよ。その思いが、ずっと頭から離れませんでした。そして、高校卒業から７年が経った。今、俺は、ずっと勝てなかったアンナが崩壊していく様を、この目で見つめている。それは何か、心の曇りがサーっと晴れていくような感じ。復讐心。これは俺の、７年越しの復讐心なのです。あーあ！俺って本当底意地わる！…でも、お店がなくなったら何だって言うんだよ。別の道に進む。それだけだろ。…今回の計画に、一点の曇りもない。ゴーゴー、ブラジル！…今日、日本代表はブラジル代表にけちょんけちょんにされる。そして、アンナの夢は、豪快に砕け散る。…俺はハイボールを片手に、座席に戻る。『後半、始まったみたいだな。』

アンナ　ユウスケが戻ってきた。『そうだね。』

ユウスケ　『よし。この試合、見届けて、大事な決断、しないと。』

アンナ　『うん。』私は再び、自分の運命を委ねるこの試合に目を向けた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋

エリカ　あれ？日本代表が相手のゴール前に１，２，３，４，５人。これは、攻め込んでる？…ちょっとお。頑張れよ、ブラジル。君たちが勝ってくれないと、私たちは旅立てないんだからさあ。もっとコテンパンに日本を倒してよ。…でも、ナルミちゃんが言ってた。日本は何回もベスト１６で負けてるから、ベスト８に進出できないってジンクスがあるから。今回も負けるって。それを思い出して。この苦しい時間はもう終わると思うと、全てのことから解放されたような気がして、楽になった。『ナルミちゃん、ジュース買ってくるね。』私はナルミちゃんにそう告げ、３３１ブロックの階段を下りた。

ナルミ　階段を下りていくエリカの姿が見えなくなると、安堵のため息が出た。私は、エリカをここに連れてきたことに、後悔を感じ始めていたのです。二人であの世へ行こうという計画は、冗談のように言っただけなのです。少し面白がって言っただけなのです。私がそう言ったら、どれぐらい驚いた顔をするだろう。試してみただけなのです。単なる意地悪な、思い付きの一言だったのです。だから、エリカがこの話に乗ってきたのは、完全に予想外でした。

エリカ　売店に到着する。『コーラとオレンジジュースください！』ナルミちゃんが喜ぶだろうと思って、二つ買った。

ナルミ　エリカとはＳＮＳで知り合い、私が呼び出し、それから2日間、レストランや漫画喫茶を連れまわしました。私たちは、生きている価値がないという思いでつながっていました。生きている価値がない。何もできず、何の役にも立たないこんな人間は死んだ方がまし。そして、そんな自分が大嫌い。この2日間、そのことばかり話しました。屈託のない笑顔を時折見せるエリカは、生まれてからずっと一緒に育ってきた妹のようにも思えました。でも、そうやってエリカと接していると、一つの確信が生まれました。エリカは決して死ぬべき人間じゃない。彼女は人を愛するエネルギーに溢れている。今は姉の役に立てなかったと言っている。私は無力だと。そんな自分を愛せないと言っている。自分が大嫌いだと。でも、もしそうだとしても、彼女の何かを愛するエネルギーは、きっと誰かを幸せにする。また、そんな彼女を愛する人は、これからたくさん見つかるだろう。そう思えてきたのです。だから私は後悔し始めていたのです。日本代表が負けたら、彼女をあっちの世界に連れて行かなければいけなかったのですから。

エリカ　飲み物を抱え、ウキウキしながら席に戻る。通路からＬＥＤビジョンがちらっと見えた。また日本代表が相手の陣地に１、２、３、４、５人。…ちょっとお。ブラジル、もっと頑張れよお。…だんだんブラジルのプレーが緩慢に思えてきて、イライラしてきた。…せっかく応援してあげてるのにさあ。地球の裏側に抗議しに行こうかな。…ぶつぶつ言いながら歩いていると、自分が今どこを歩いているのかわからなくなった。…あれ？…ここは何ブロック？

ナルミ　すると、大きな歓声が上がった。

ユウスケ　ブラジル代表のショートカウンター！背番号７番、ヴィニシウスのシュート！

アンナ　あ！

ナルミ　あ！（少し間）…外れた。良かった。でも、今の攻撃を機に、ブラジルの攻撃にスイッチが入った。ブラジルの猛攻が始まる。その様子を見ながら、私は確信する。今日、やっぱり日本はブラジルに破れる。私は、これから起こる、取り返しがつかない出来事に対する不安と恐怖で、ＬＥＤビジョンを見ながら、震えが止まらなかった。